

『地球の洞察—多文化時代の環境哲学』

J・ベアード・キャリコット著、山内友三郎・村上弥生監訳

みすず書房、2009年

おやさと研究所教授

金子 昭 Akira Kaneko

もう7、8年前になるが、中国の環境倫理研究者と共同研究を行った際、中国で目下紹介され注目されている日本の環境倫理思想はマルクス主義と池田大作のものだと聞かされて驚いたことがある。我が国の思想が海外で紹介されるにしても、その紹介のされ方にずいぶん偏りがあるものだと知らされる思いだった。

英語圏でも、日本の環境倫理思想として取り上げられるのは、英訳された文献や情報によるものばかりである。そこにある種のバイアスが生じるのは否めない。本書とて例外ではなく、日本の伝統的環境倫理として引用されるのは、道元や芭蕉、鈴木大拙などに関する英語文献である。キャリコットはこれら禅思想や伝統文化のうちに、高度に発達し洗練された環境美学があると述べる。その一方で彼は、東南アジアの森林伐採や世界の海洋での魚の乱獲に最も加担しているのが日本でもあると、指摘を怠ることはない。(捕鯨に対する見方はいかにも欧米人らしい。日本の鯨供養のことは知らないようだ。)

ここにオリエンタリズム的な“知の帝国主義”を見るのはたやすい。しかし、著者はそのような批判を先取りする。これを承知の上で、あえて意図的に挑発し比較環境哲学の議論を加速させようとしているのである。だから、おおいに批判精神をもって本書を読むことこそ、読者に期待されていることなのだ。そもそも、一人の研究者が世界の伝統的なエコロジー思想や環境倫理を総ざらいして論じていこうとするわけだから、記述の濃淡、議論の深淺、また一種の偏向は無い方がむしろおかしいと見るべきだろう。

むしろ私は、地球上のさまざまな民族や文化の環境思想について、可能な限り網羅的に調べ上げ、その独自性を見出した上で、その実践的な可能性をも読み解いていこうとするキャリコットの姿勢を高く評価したい。着眼点や論述についての多少の偏りにもかかわらず、そこに一人の環境倫理の理論家の力強い知の営みがあり、その意味で本文約500頁にもなる本書はじゅうぶん読みごたえのある著作である。

本書がなにより目的とするのは、未曾有の地球環境危機に直面している今日、人類のエコロジーの知的資産の監査報告を行い、世界のさまざまな民族の伝統や思想が役立てられるようにすることだという。相互に独立した多様な知の伝統に由来する環境への態度と価値観は複数の環境倫理があることを示す。また現代の国際的な科学的世界観から導出されるエコロジーの良心は人類に共通した一つのものである。この「多と一」の両視点にともに配慮しつつ、両者間の緊張関係を解消することをめざす世界哲学的展望の下に企てられた、この環境倫理の研究は、読者に大きな視野と深い感銘を与え、また読者の内なる批判精神を呼び覚ます。『地球の洞察』(原文は *Earth's Insights* と複数形になっている) はまさに内容に相応しい標題だ。

キャリコットは、独自の包括的視座から世界の環境倫理の分類と検討を行う。東洋と言っても、南アジア(インド)と東アジア(中国)と地域別に論じ分けつつ、それらに固有な伝統思想を考察し、さらに両地域にまたがる仏教の場合は前者の上座

部仏教、後者の大乘仏教をそれぞれ別個の特性を有する環境倫理として取り上げる。西洋と言っても、ユダヤーキリスト教やギリシアーローマの二大伝統だけではなく、そこに従来含まれず、また論じられることの少なかったイスラームの環境倫理にも言及し、さらに西洋における文明の土着思想であ

るガイア(地母神)の復権についてもエコフェミニズムとも連動させながら論じていく。それだけではない。極西の環境倫理としてポリネシアや北米インディアンの宗教的エコロジー思想を取り上げ、さらに南米先住民族、アフリカ、オーストラリアの土着の環境倫理についても縦横に論究しているのである。よくここまで網羅的に調べたものだと感嘆するし、世界の環境倫理について新しい知見をいろいろと得ることもできる。

例えば、我々はアフリカの環境倫理には通常なかなか思い及ばないし、そこに土着の環境倫理があるにしても、それはきつと自然と調和的なものではないかと、漠然と想像するぐらいだろう。驚くべきことに、キャリコットは、アフリカの創造神話をもつばら一神教的で人間中心主義の傾向を有し、そこからは「弱い間接的な環境倫理」以外のものは望めないかもしれないと分析する。あるいはここに一種の偏向が存するのかもしれないが、読者はまさにこの分析に意表を突かれ、自分なりにアフリカの環境倫理を調べてみたいという気にさせられる(私がまさにそうだ)。実は、これこそが著者のねらいなのである。

彼はまた、伝統的な環境倫理の実践活動の記述にも目配りを忘れない。ユダヤーキリスト教はアメリカで教会の「グリーン化」に後押しされて土地の番人プロジェクトとして展開し、ヒンドゥー教はインドで森林保護のチプロ運動として結実し、仏教はスリランカで持続可能な開発を目指したサルヴォーダヤ運動を起こしている等、現在進行中の活動についても興味深い報告をしている。

監訳者の一人、山内友三郎氏は、わが国でも、思想家や宗教家や教育者が地球環境問題に取り組んでいく必要があると語っている。自己の伝統文化を見直し、その環境思想的意義を復興させ、それを世界に向けて発信すべきだという。山内氏自身も、国際二宮尊徳思想学会などを通じ、積極的に日本の伝統的な環境倫理思想の発信に努めておられることを付記しておく。

